

体感。感動。感謝。NBUのCOC事業をお伝えします。

coc-nbu.jp

November 2015 Nippon Bunri University, COC MAGAZINE

文部科学省
地(知)の拠点



日本文理大学COC事業

おおいた、つくりびと

モンゴルプロジェクト

異文化交流から“多文化共生”の時代へ。
モンゴルと日本をつなぐ「絆」の物語。

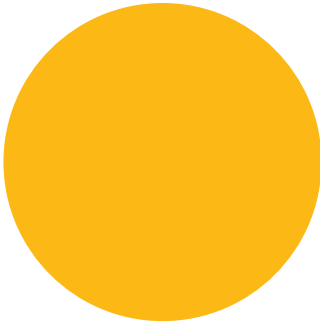


No. 03

キラリびと

『おおいた、つくりびと』で活躍する学生、
教職員、地域の皆さんにインタビュー。

03



モンゴルプロジェクト メンバー
工学部 情報メディア学科2年

梶原 百香

Q. モンゴルプロジェクトの
「大分キャンプ」を振り返って。

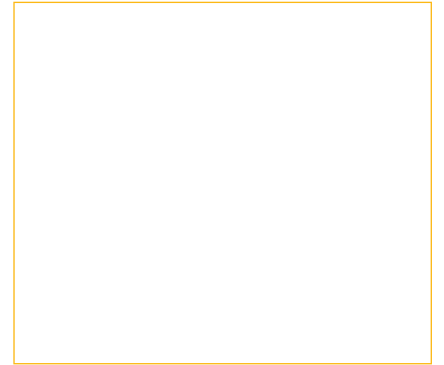
A. モンゴルの学生は二人とも女性だったので、NBUメンバーの中では私がいちばん一緒にいた時間が長かったと思います。最初は気を使っていたのですが、10日間も一緒にいると片言の単語だけでも何が言いたいのかわかるようになりました。改めて海外の人たちとのコミュニケーションについて考えるきっかけになりましたね。直接的に言葉は通じなくてもジェスチャーやスケッチブックを使って絵を描いたり、いろんな方法があることに気づきました。

Q. 印象に残った出来事はありましたか？

A. キャンプの中盤で、「せっかく日本に来たので着物を着てみたい」というリクエストを聞きました。当初の予定にはなかったのですが、着物は無理でしたが、なんとか浴衣を準備すること

ができました。そのことをすごく喜んでくれたのが本当に嬉しかったですね。準備をしっかりしたつもりでも予定通りに進まないこともたくさんありましたが、今できることを、その場の状況や、相手のニーズに合わせて考え、カタチにしていくことの大切さを学んだ気がします。次はメンバー全員でモンゴルへ行き、今回の活動のモンゴルバージョンをやりたいです。

and more...



PICK UP! COCプロジェクト

2015.10.10 **一束の稲穂の重み**

建築学科「プロジェクト1」で秋の地域体験交流活動

澄み渡った秋空の下、豊後大野市大野町土師地区で、稲刈り・かけ干しの作業を手伝った。以前、ネットで調べたら、茶碗1杯分のご飯は3200粒と書いてあった。たった1粒の種籾から、すくすくと育ち、黄金色に輝く稲穂。作業に入る前に、思わず数えてみたくなる。作業が終了後、「こうして若い人が手伝ってくれるから、私も、もう少し頑張れる気がします」というおじいちゃん言葉が心に響いた。何より便利な機械があったら、高齢者でもできるものだと思います。これが悔やまれる。機械が入れない場所もあるし、もっと大切な「もの」もある。これまで無関

心でいたことも恥ずかしくて口に出せない。

当たり前のようにご飯を食べていた裏には、人手不足だけではなく、もっと深い問題が絡んでいたのだと気づいた。課題・問題のある地域のために何とかせねば、その為にもっと学ばなければどうにもできないという気持ち湧き起こってきた。

よし、今日の出来事を、母さんに伝えてあげよう。

まだまだあります！
大分県内をステージに進行中の
プロジェクトが盛りだくさん。

- 採穂作業を通して働くことを考える
- 「川の港まつり」で学んだ「地域で生きるってこと」
- 夢に向かって羽ばたく滑走路 etc...

くわしくはNBUのCOC特設サイト **coc-nbu.jp** へ